隠人使い　２　呪われし者＜２＞

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隠人使い　２　呪われし者＜２＞

【Ｎコード】
Ｎ１３２２Ｏ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
東京　神田の将門神社から薄闇の中、低い声が響いた・・・　・・・

弐（前書き）

ぼちぼち・・・　・・・

弐

東京　神田にある将門神社の奥から深夜低い声が響いた。
「来たな、土御門。」
鬱蒼とおいしげる樹木の中には人影一つない。声はその奥から聞こえる。
満月が。
輝く夜の事だった。

「猫？」
放課後の校庭で、土御門　綾と肩を並べる藤宮　望はそう尋ねた。
「何だって新谷君と猫が関係するんだ？」
「式神が答えを持って来たんだ、昨日。」
冷やかな声で綾は答えた。「望、新谷は猫を飼っているか？」
「猫ねぇ・・・　・・」
人影疎らな夕方の校庭。「俺もあんまり新谷君の事知らないからねー。」
「さぁ、どうしたものか。」
綾は目を細めた。「何かしらの関係でその黒い影と猫、そして新谷は繋がっている。」
「じゃ、井上に聞いたら？」
望は視線を綾に向け、「井上、ジモティだし情報色々持ってるよ。何か知ってるかも。」
「そうだな。」
「俺、今、携帯かけて聞いてみるよ。」
望はそう言うと、制服の胸ポケットから取り出した携帯の短縮ダイアルを押した。
「短縮に登録してるのか？井上を。」

るるる　るるる

「うん、あの事件以来結構話すようになったからねーーーもしもし、井上？」

『はーい、藤宮君♪』

「飯田先輩とはうまくいってる？」

『やだなぁ、もう！藤宮君ったら。』

「何を遊んでいるんだ。」

無愛想に傍らの綾が呟く。

「ううんーーーえっとさ、ちょっと聞きたい事あるんだけど今いい？もしかして、飯田先輩と今一緒？」

『うん！あと３０分！こっちからＴＥＬするわ、藤宮君。』

「何だ。結局くっついたのか、あの２人。」

半分呆れた様に綾は言った。

そして、携帯を切る望。

「何かね。」

望はくすくす笑いながら、「綾の事、縁結びの神様とか言って、女子の間では噂になってるらしいよ。」

「・・・　・・・。」

綾は無言で睨みつける様な眼差しを望に向けた。

「違うよ！俺じゃないって！噂だよ、噂！」

「いい。」

綾は目を伏せ、「またメル・アド変えるから。最近、その手のメールが多くて困ってたんだけど、それが井上と飯田先輩との事が原因とは思わなかった。」

心底嫌そうにそう言う。「それよか」

と、続ける。

「井上に聞くより、新谷本人に聞いた方が早いんじゃないか？」

「・・・　・・・。」

望は眉間に微かに皺を寄せた。

「どうした、望。」
綾が問いかける。
「・・・　・・・これも噂だけど。」
「何。」
「新谷君、綾の事完全に『拝み屋』だって思ってるトコあるみたい。何だか、この間、どっかの霊能者らしき人を探してるって噂で聞いた。」
「・・・　・・・」
今度は綾が眉間に皺を寄せた。「・・・　・・・。」
「怒った？綾。」
「・・・　・・・別に。」
綾は無愛想に短く答えた。

弐（後書き）

ぼちぼち・・・　・・・（滝汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1322o/

隠人使い　２　呪われし者＜２＞

2010年10月9日09時04分発行